

## 情報連携基盤センターに期待する

稲 垣 康 善

十数年前に、すでに“Technological change has placed communication in the front lines of social revolution. (技術革新によってコミュニケーションは社会変革の最前線に立つようになった。)”とウィリアム ペイズレーは述べている [ 1 ]。21Cに入った今も情報通信分野の技術革新の勢いは変らないどころか、ますます勢いを増しているように見える。

総務省発表による平成14年情報通信白書(「情報通信に関する現状報告」)は、「IT活用型社会の胎動」をテーマに掲げている。我が国のインターネットの利用者数は5,593万人(2001年12月現在,推計),世界のそれは5億4,420万人(2002年2月現在,推計)と報告している。また、飛躍的に拡大するブロードバンド,第3世代携帯電話のスタート,放送のデジタル化と,技術の進歩と普及を指摘している。一部には,いわゆる「ネットバブル」崩壊をきっかけに「IT不況」などと経済不振の原因をITに求めたり,ITブームは終わったとしてIT革命への取り組みを軽視したり,一方ではIT自体を自己目的化してしまうようなきらいがないでもないが,決してITが社会変革を起しつつあるという状況が変わったわけではない。

情報通信分野の技術革新は着実に社会変革を伴いながら進んでいる。昨年の4月にいくつかの銀行のコンピュータネットワークシステムを統合して出発した,みずほ銀行のネットワークの混乱による騒ぎは,銀行が決済システムをサポートする情報産業の様相を呈していることをあからさまにすることになった。e-Japan計画,e-コマース,e-メール,e-ラーニング,...など,政治,経済,技術,生活,教育,...の面で,一言で言えば文化の面で変革が起きている。しかも社会変革のスピードを加速しながらである。時代は,好むと好まざるとにかかわらずその流れの中にある。

大学もまた例外ではない。超高速ネットワークは双方向型のディスタンスラーニングを可能にし,キャンパスや講義室の意味を変えようとしている。リンクで繋がれたWWWサーバが巨大な情報システムを構築し図書館の役割と意味を変えようとしている。研究に用いられる情報資源も地球を覆うウェブの中に蓄積されるようになり,電子的なスピードで望みの情報にアクセスできるようになってきている。実験研究もコンピュータとネットワークに強く依存しているし,大規模コンピュータシミュレーションシステムはバーチャルラボラトリを可能にしている。パイオの研究もコンピュータとネットワーク技術の支えなくしては,世界の研究のスピードについていくのは難しく,ましてや世界の研究の最前線をリードすることなど無理である。研究の仕組みも変わりつつある。

今から数えるともう8年前になるが,当時の情報処理教育センター長の毛利佳年雄教授を代表とする調査団が工学部から派遣された。米国主要大学の工学教育におけるコンピュータ利用調査

のためである。カルフォルニア大学バークレー校，マサチューセッツ工科大学，ミシガン大学，カーネギメロン大学，ノースカロライナ州立大学，スタンフォード大学を訪問調査した。その報告書は，つぎのように指摘している。「米国ではどの大学でも1980年代後半に，情報の能動的な獲得と利用，情報の共有，情報の共同的創出という新しいコンセプトのもとにネットワークが拡っており，また，コンピュータは現代工学において頭脳につく重要なツールであるという認識のもとに，教育研究を支援するコンピュータ環境が整備されていた。」そして，「1980年代に日本が“Japan as number one.”と言われていい気になっている間に，実は情報分野で大きく水をあけられていた。」と述べている。

機械が人の力を増幅するように，あるいは飛行機や自動車は人の移動の力を増幅するように，コンピュータとネットワークは人の頭脳の力を増幅する。知の創造と知の創造者を育む場である大学にとって，コンピュータとネットワークの環境整備は，21Cに大きく飛躍して社会に貢献するために不可欠である。IT環境の整備とその高度利用は，情報の創造者である研究者を育成する大学の死命を制することになる。

平成14年4月に，情報基盤システムデザイン研究部門，学術情報開発研究部門，情報基盤ネットワーク研究部門，大規模計算支援環境研究部門の4つの研究部門を有する情報連携基盤センターが発足したことの意義は大きい。全学的な協力のもとにこのセンターの設立が図られたのはそれだけ全学からの期待が大きいということである。

情報化社会の成長のもとには，「もの」や「エネルギー」や「サービス」のそれではなく，情報の生産・流通にかかわる知識産業が興ることである。大学は，研究活動をとおして，特に基礎研究によって，情報を創出し，かつ情報創出者である研究者を育成する。このような研究大学は，情報化社会では，工業化社会における工場のような役割をにない，情報化社会の成長を支え，その方向を決める中心的な組織になろう。

この意味で，大学の情報化時代の戦略を立てることは重要である。また，その実現のために必要なIT環境のデザインが，常に一歩先を見ながら，提示されることが望まれる。この点からも新しい情報連携基盤センターが中心的な役割をはたしていただきたい。

新センターの発展を願いつつ，期待を一言申し述べた。

## 参考文献

- [ 1 ] William Paisley (1985) : “Communication in the Communication Sciences” in Brenda Dervin and Melvin J. Voigt (eds.), Progress in the Communication Sciences, Vol.5, Norwood, N.J.

(いながき やすよし : 名古屋大学大学院工学研究科教授  
前名古屋大学大型計算機センター長)